

止痢剤無効の難治性症例にも ビフィズス菌の効果が現れる

社会医療法人全仁会 倉敷平成病院 (岡山県倉敷市)

難治性下痢への対応

白壁の古い建物が並ぶ倉敷市の美観地区。そのほど近い場所に、倉敷平成病院は位置する。急性期112床、亜急性期20床、回復期リハビリテーション病棟88病床。院内のリハビリテーション部には107人もの療法士が在籍し、積極的な在宅復帰に努めている。



写真左から、吉岡毅医師、管理栄養士の小野詠子さん、看護師の小山恵美子師長、栄養科主任の津田和美さん

実践

しかし、「リハビリテーションを行なう上で障害となるものの1つが下痢です」と、看護師の小山恵美子師長は言う。下痢は低栄養や訓練時間の短縮につながり、十分なリハビリ効果が得られない。

「栄養科と連携してさまざまな方法を試行錯誤し、日々戦っています」（小山師長）

回復期リハビリテーション病棟では、摂食・嚥下障害で経腸栄養管理となっている患者が約3割を占める。下痢が発生すると、まず抗生剤などの内服薬を確認し、下痢の原因となっている可能性の高い薬剤があれば、それを中止。経口摂取の場合は乳糖不耐症の可能性を考慮して、乳製品を中止。経腸栄養の場合は、乳ペプチドを配合した流動食「E-3」（株式会社クリニコ）や半固形化栄養食品に変更。最終的には、経腸栄養ポンプを使つての低速投

与となる。場合によって、同院で独自に作成した「なめらか食」の使用を試みることもある。

「なめらか食とは、ミキサー食を胃ろうからカテーテルチップで注入するため、繊維の多いものを裏ごしし、よりなめらかな状態にしたものです」と、管理栄養士の小野詠子さんは説明する。

「もともとは経管栄養の注入時間を短縮し、QOLの向上目的で始めたものです。好きなものを少量負担なく摂取し、残りを胃ろうから注入することで必要エネルギーは補えます。また家族と同じ食事を食べてもらえるという利点もあります。栄養剤ではなく、食事を注入するため、下痢にも一定の効果がみられています」（小野さん）

また、下痢と薬剤の関係について、消化器科の吉岡毅医師は、「突然の下痢は抗生剤を原因とする場合が多いです。また、一般に高齢患者については、逆流性食道炎などに対し、漫然とプロトンポンプ阻害薬（PPI）が使われているケースがありますが、最近になってPPIと慢性的な下痢症（microscopic colitis）との関連が認知されつつあります」と説明する。さらに、薬剤や栄養剤に起因せず、かつ、原因の特定が難しい下痢



倉敷平成病院内にある売店では、院内で使用している栄養補助食品やとろみ剤などを販売しており、退院後もシームレスな在宅療養を送れるように配慮されている

も少なくない。これについて吉岡医師は、「長期入院という生活環境やリハビリテーションそのものに対するストレスから、過敏性腸症候群（IBS）を発症することも考えられます。あるいは、これらが複合している可能性もあります」と分析する。

「下痢の治療において大切なのは、下痢の原因を究明し、原因に応じた加療をすること。しかし、その原因の究明が困難な場合があり、わからないことが多々あります。そのため、原因と思われるものを可能な限り一つずつ取り除き、その上でできることを行なっていくしかないのです。できること、その選択肢は多いに越したことはありません」（吉岡医師）

数ある手段の1つとして ビフィズス菌の効果を検証

吉岡医師の言う、できることの1つとして、同院が注目しているのがビフ